

# ペンの力で社会や地域を良くしたい



茨城新聞社 論説委員長

ふじ えだ とも あき  
**藤枝智昭**さん

みの〜れと共に生活するスタイル  
**Minole Life**  
**のすすめ** No.201

「文化施設はだれのためのものか。その問いに明快に答える形で、美野里町でいま文化センターの建設準備が進められている」。みの〜れ誕生の3年前、このように称えてくれたのは、茨城新聞の藤枝智昭さん。あれから約25年。現在は茨城新聞の論説委員長を務める藤枝さんが、いまみの〜れをどのように見ているのか、インタビューしました。

## 想いを後世に伝えること

ペンを執って41年。地域に関心を持ち続け、記事にすることで「みんなで課題を共有して、みんなで考えよう」というきっかけになれば」と藤枝さん。「ペンの力で、社会や地域が少しでも良くなったらという思いで書いています」。

約25年前、茨城県内にできた特徴的な文化ホールを取り上げる記事を連載していた藤枝さん。県主催による市民向けのアートマネジメント講座に美野里町から参加していた4〜5人の女性が「美野里町に文化センターを建てるにあたって住民と行政が対話をして、自分たちが使いやすいホールを創ろう」と語ったことに感銘を受け、担当課長の沼田和美さん（後にみの〜れ

初代館長）に話を聞きに行きました。

「建設反対の人にも一生懸命話を聞いているという点に注目しました」と藤枝さん。「賛成の人だけで話し合うのではなく、反対の人の意見も取り入れて創ろうという進め方は、ユニークで素晴らしいと思えました」。

平成12年4月9日付の茨城新聞の一面には、藤枝さんが書いたみの〜れの記事が取り上げられ、「構想段階から住民参加方式」「過程を重視」と大きく報道されました。この記事に勇気づけられ、住民活動がさらに加速

して、数々のプレイイベントやプロジェクトが展開していききました。その一つが、藤枝さんも見守ってきたという「みの〜れ住民劇団 演劇ファミリーMYU」です。

「自分たちで創り続けている成果が出て、みるみるうちに質が高まっていきました。

役者とスタッフの熱量は舞台から客席に伝わります。それは素人もプロも関係ないと思います」。活動を通じて、まちを担う人材が輩出されている点も評価しています。

「みの〜れに関わってイキイキ暮らしている人たちがうらやましい」と語る藤枝さん。「参加参加する市民がたくさんいるということは、それだけ魅力があるということ。市民が主役になれる文化ホールは、全国でもなかなかありませんよね」。

22年前、文化がみの〜れ物語の取材に、藤枝さんはこのように答えています。「みの〜れの進め方は日本でも数少ない事例。初志貫徹すること、この思いを後世まで伝えていくこと、記録にきちんと残すことが大切」。みの〜れライフのすすめが、その一端を担えていれば幸いです。

（藤田佐知子）